

大仏探訪

大仏といえ、日本最大の牛久大仏、奈良の大仏、鎌倉の大仏が有名なところだが、大仏と呼ばれているものは全国各地にあつて、けっこう身近なところにもあつたりする。大仏の作風には、毘盧舎那仏、釈迦如来、阿弥陀仏などがある。仏像だけでなく、各種の観音像や不動明王像。閻魔像などでも、かなり大きなものが造られている。

素材もいろいろで、青銅ブロンズや石、コンクリート、木製、FRP (プラスチックの一種) のものまである。その見上げてみる堂々たる姿にはそれぞれインパクトがあり、驚かされる。重量感が半端ではない。(ただし、大きなものを作ってしまうと、解体するときに大変になる。そんな例が、淡路島で現実に発生している)

丈六じゅうろく以上のものを大仏と呼べるだろう。丈六とは、仏陀の背高を基準とするものであり、一丈六尺、約4.8メートルだ。ただし尺には時代によっていくつかの基準があり、長短が異なる場合がある。座った姿の、結跏趺坐けつあふざの場合、立ち上がったとすれば丈六になるも

のは、つまり座高八尺でも、丈六の仏像という。それだけの大きさについては蓮台(像と一体化されて制作される場合がある)や基壇を含んで表示している場合があるから、数値で比較するには注意を要す。

大観音と言え、以前にこの雑事記で埼玉県飯能市の鳥居観音や小田原市早川の魚藍観音を紹介したことがあつた。それに加えるように、今回の記述では私が物見遊山ものみゆざんで近年出向いた大仏・大観音のいくつかを紹介したい。近隣地域に限定する。ただし、鎌倉にある大きな仏像・観音像についても記述したいところ(長谷観音の大きさには驚かされる)だが、有名すぎるので省略する。

仏像はそれぞれ開眼かいげんされ、魂が宿るものとされる。人々の崇拜の対象になつてゐるわけで、拝観するにはそれなりに所作があり、礼儀をわきまなくてはならない。けれど、信仰心の薄い私だから、礼を失したことがあるかもしれない。

なお、あなたが拝観するときには、特別の観覧料金

を取るお寺では所定の金額を、そうでない場合は、大きさに敬意を表して100円程度の賽銭を投じよう。

①上野大仏（東京・上野公園）

東京・上野公園のほぼ中央部にある盛り土の頂上（寛永寺・大仏山と呼ばれる）には、パゴダがある。大仏はその中ではなく、周囲の塀の一角にある。青銅製の大仏の顔部分が額のような壁面にはめ込まれており、近寄って見られる。私は、その存在を知ってから、上野に行くついでに数回ここを訪れた。一番古い日は、2010年11月7日であり、下の画像もそのとき撮ったものだ。

大仏の建立は1647年だったというから、かなり古い。江戸時代初期のものだ。像高6メートルの釈迦如来坐像として近年まであったが、1923年（大正12年）9月の関東大震災で頭部が落下した。大きく損壊し、修理されないまま、昭和15年に寛永寺は軍需金属資源として顔面部位以外の金属部分を供出した。そんな暗い過去があったとは、私は最近まで気にも留めていなかった。あばたのような痕跡があるのも、そんな苦節を物語っているのだろう。

その顔部分だけをここに保存している。これを手が

かりに、全体像を思い浮かべよう。かなり大きなものだったことがわかる。

この顔は、なかなかユニークであり、鼻が大きい。やや微笑んでいるような、いないような……。ほとんど目を閉じているから、見方によっては、デスマスクかもしれない。



顔部分だけの上野大仏

② 塩船^{しほね}平和観音（東京都青梅市・塩船観音寺）

2015年5月3日、青梅線川辺駅から約2.5キロ北の丘陵部にある塩船観音寺へ行った。当日、寺では「つつじまつり紫燈護摩供厳修」が催され、秘仏の観音像が開帳されるとあって、私はそれを拝観しに行った。臨時直通バスが出ていたが、人々が長蛇の列で待っていたから、並ぶのが好きではない私は歩くことにした。駅から歩いて行く人も何人かおり、ついて行ったので、道に迷うことはなかった。でも、帰りにはバスを利用した。



塩船観音寺・金剛力士
うんぎょう
咩形像

塩船観音寺はこの地域では古くから有名な寺であり、多くの人が、押し寄せるように参拝に来ていた。車で来る人のために臨時駐車場があったが、満車になっていた。

入山料として300円を払って、かやぶきの仁王門から入ってゆく。その一对の金剛力士像には、風雪に耐え抜いたような風格があり、私は気に入った。



塩船平和観音

坂を上りながら、いくつかの古いお堂とその中の仏像を見て回る。観音堂（？）の中には、本日開帳になった観音像を間近で見ることができた。金箔でまばゆ

い千手観音像だ。ほぼ等身大で、さすがに精巧に彫刻されていた。撮影禁止だったから、画像はない。

それとは別にブロンズ製の大観音があるとは、私は知らなかった。山の中腹に広がるツツジ庭園の上方にそれが見えている。一面に色鮮やかな花が咲いているツツジの植え込みのなか、その姿を見上げながら、回り込むように、上り坂を歩いて行く。

そしてその足元まで近づく。この観音像は、下方にいる人々と比べるとわかるように、高さが15メートルほどある巨大なものだ。衣のひだのうねりぐあいなど、なかなかよくできている。左右の手の形がよい。左手に持った徳利とくぐりに酒が無くなったので、「もう一本、酒もってこい！」と言っている？

③ 東京大仏（東京都板橋区・乗蓮寺）

2016年3月6日、高島平駅から30分ほど歩き、東京・板橋区にある乗蓮寺を訪ねた。

乗蓮寺は、裕福そうなお寺だ。本堂もなかなか立派な造りだ。広い階段を上がっていくと、右手に大仏がある。蓮華台（高さ2.3メートル）の上に座って黙想している姿だ。東京大仏と名づけられている大仏は、さすがに大きい。約8.2メートルの高さがあるとい

う。鎌倉大仏の11.5メートルには及ばないものの、かなりの量感がある。



乗蓮寺の東京大仏

ブロンズ製で黒光りしている。流麗に仕上げられている。雨に濡れてもぜんぜん気にしないような、たくましさがある。

蓮華台の下の台座（基壇、高さ2メートル）の中は空間になって、何かが収められているようだが、閉じ

られていた。

近隣には赤塚公園があり、そのエリア内に郷土資料館や区立美術館がある。さらに足を延せば、赤塚植物園もあるから、それぞれ見て回りたい。赤塚植物園の場合、見所になる時季を確かめる必要があるかもしれない。

④ 地藏像（伊勢原市・保国寺）

2019年8月13日、比々多神社を起点として出発し、^{ひりみね}聖峰（標高380メートル）に登った。神奈川県伊勢原市にあり、さらにそのまま尾根筋を上ってゆくルートをとれば、^{おおやま}大山（1252メートル）に行き着く。でも、そこまで登らずに、聖峰の頂上付近に聖峰不動のお堂があるので、中を拝観しようと思った。（石造の不動明王像があった）

その登山口に行くまでの間に、保国寺という中規模のお寺があったので寄ってみた。寺の一角に地藏堂が建てられている。お堂の扉は閉められているが、のぞき見できるように、小さい窓が開いている。その中に丈六の巨大な地藏像があった。

「ん？ これはおおきい！」



保国寺の地藏像

ぬうっと姿を現したかのように、赤い衣を着た金ぴか肌の地藏が大きな顔でこちらを見下ろしている。頭が天井につかえそうだ。足を組んで座っている。もし、これが立ち上がったら、優に天井をぶち破ってしまう。右手には、武器らしい棒を持っている。幼い子どもがこの異様な姿を見たら、泣き出してしまおうだろう。思いがけず、珍しいものを拝観した。

⑤ 鹿野大仏（東京都日の出町・宝光寺）

東京・日の出町の山間に大仏が建立されたというニュースが近年報じられ、私は一度行ってみようと思っていた。

2019年8月18日、大仏に会いに行くことを思い立った。拝島駅を経由し五日市線で武蔵引田駅に降り立った。歩道付きの広い道を歩いた。夏の暑い日だったから、歩くのはしんどかったが、バスの便がほとんどなかった。

ようやく寺にたどりつく。宝光寺はこの辺りでは大きな寺だ。広い霊園を経営して（秋川霊園）、経済的に余裕があるようだ。寺の門、鐘楼、本殿、庫裏のそれぞれ高級そうな造りをしている。

お寺からの道は上り坂になっている。ここは車で来るところだったかもしれない。広い駐車場が用意されていた。丘の上に鎮座する大仏が見えるところまでくると、柵があり、拝観料をとるための管理小屋に導かれる。柵の外からでも、大仏が遠方に見えるのだが、ここまで来たら、近くまで行かなければならない。ちよっとしたハイキングのように小道を登っていく。

登り切ると、平らにならされた地面にコンクリート製の台座があり、その上に蓮華台、そして大仏が結跏趺坐しておられる。山の中腹を切り開き、丘の上に大仏が鎮座している格好だ。



鹿野大仏
日の出町・宝光寺

この大仏は乗蓮寺の東京大仏に似たイメージがある。姉妹仏のようだ。東京大仏に対抗して、少し大きめに

作ったようだ。

台座の中に入ってゆける。ここは他の大仏の台座とは違い、納骨堂ではないようだ。暗い中を進むと、仏の世界をイメージしたかのような部屋に、金ぴかの仏像があるには驚かされる。照明で神々しさを演出している。よくできているから、これはぜひ見ておきたい。ただし、大仏の体内にまでは入ってゆけない。

この鹿野大仏も、鎌倉大仏級の大きさだから、おいそれとは作れないだろう。周辺もよく整備されている。資金が足りたのだろうか、と少し余計な心配してしまう。

⑥ 釈迦如来（厚木市・妙伝寺）

2019年8月31日早朝、厚木市上依知かみえちの妙伝寺（妙傳寺）に行った。この日、このあと愛川町へ行くついでがあったから、車で寄った。

大仏があるという情報を得て、私の住んでいるところから比較的近場（県内）にあるものだから、近々拝観しようと思っていた。

幹線道路から外れて田園地帯に入ると、妙伝寺があった。駐車場に車を停めてから、いそいそと境内に入ると、二階構造の建屋、釈迦堂がある。大仏殿として

はやや小ぶりだが、この中に丈六の木造釈迦如来立像がおられる。



妙伝寺の釈迦堂

扉は鍵がかかって開けられないが、格子の隙間からぞくようにすれば、何とか見られた。この立像は大きすぎるためか、釈迦堂に卡ろうじて収まっているので、上方に（釈迦堂の二階部分）ある尊顔が見えに

くい。肉眼では、一つの角度からかろうじて見えたのだが、扉の格子の隙間からカメラレンズを向けることがむずかしく、顔半分が切れた画像しか撮れなかった（そのために、寺の人に扉を開けてくれ、とは言うことは思いつかなかったし、思いついたとしても言えなかったろう。私は遠慮深いので）



釈迦如来立像

これは元禄のころの古い仏像ながら、よくできている。顔や胸の部分に金色の輝きを多く残しており、よい状態を保っている。開帳されるときがあれば、もう一度来てみたいものだ。



山門の持国天（？）像
（金網の隙間から撮影）

なお、寺の山門には、ふつう一對の仁王像が収まっているものだが、この門では、毘沙門天（多聞天）と持国天の木造二体がにらみをきかしている。仁王の代わりを務めるのに十分な大きさだ。左右のどちらが持国天なのか多聞天なのか、私には判別できないが、これらの像は、損壊もなく、造形的になかなかよくできている。ポリウムがあり、下半身がどっしりしている。説明によると、当初、釈迦如来像の脇侍として

1697年（元禄10）作られたものだったという。なるほどとは思いますが、四天王の他の二体はどうしたのだろうと気になった。

⑦三浦大仏（神奈川県三浦市・久里浜霊園）

2019年9月7日、三浦半島・京急長浜駅から歩いた。駅のプラットホームから、山の上に五重塔の上層部分が見える。それなりの高さのある山の上なので、歩いていくのに、やや尻込みしてしまう。それは久里浜霊園のシンボルの一つだ。この霊園のシンボルの最たるものが大仏だ。五重塔に近い位置にあるはずだが、駅からは見えない。地図によると、駅から直線的には行けず、迂回するように道を歩くのだが、五重塔が見えているからわかりやすい。

霊園の領域に入り、坂道を上る。車道も付けられているのだが、私は段々に区画された墓地の中の細道を歩いて上った。きつい上り階段が多いが、ところどころ観音像や地藏像があるので、飽きない。

山の頂上の手前に大仏があった。高さ13.5メートルあるという白い石像だ。（コンクリート像には見えない出来栄え）この仏は立っている姿なのだが、足元が見えない。雲の中に隠れているという設定だ

う。首が補強されているようだ。首は大仏の弱点なのだ（折れやすい）。巨大な光輪を背にしている。顔を見てみると、元女子スケーターの浅田真央さんを連想してしまう。



三浦大仏

四角い台座の中は、霊園らしく、納骨堂になっている。その入口の両脇には一対の仁王像が立って見張っている。これらはほぼ等身大で、例のごとく威嚇するポーズをとっている。



三浦大仏
ちょうど雲に乗っているように見える。
その台座から不審者が下りてきた

山頂は芝生の広場になっており、公園的だが、五重塔のほかにも、周囲に石像物などが並べられており、巧みに聖地らしさを演出している。

広場の奥のほうに、数十年前に埼玉県で発生した幼女4人の連続殺害事件に関係するプレートをみつけた。私にも思い当たる事件だったが、あの事件がどうして

この地と関係するのだろうかと疑問に思ったけれど、深くは追求しないでおう。

⑧ 大蔵大仏（東京都世田谷区・妙法寺）

世田谷区の街中に大仏が立っている。しかも、それが動き回るといふのだから、ぜひ見に行かなくてはならない。

2019年9月13日の朝、私は小田急線に乗った。成城学園前駅から南東1キロのところに妙法寺がある。このへんはバスの便が頻繁にあるのだが、私は意地でも歩く。（帰りには乗りたくなかったが……）

道すがら、東宝スタジオの広い敷地があり、正面の四角い建屋を見ると、壁一面にゴジラが描かれていた。威嚇し、ほえまくっている図だ。高さ約8メートルあるが、もちろん映画の中のゴジラはもっと大きい。

映画の一シーンとして、ゴジラが鹿島灘から上陸し、東京方面に向かう途中、高さ120メートルの牛久大仏（阿弥陀仏）に出会い、ライバルだと思って、ぶっ壊すシナリオは、どうだろうか。

——そうしたら、たぶん制作した映画会社にバチが当たるだろう。

そこを通り過ぎ、一方通行の狭い道に入ると、妙法寺がある。本堂の脇を通り抜け、墓地の中を行くと、片隅に大仏が立っている。ブロンズ像で、高さは約5メートルある。写真で、電線よりはるかに高いように見えているのはカメラアングルのせいだ。



東宝スタジオ・ビルの壁画ゴジラ

さて、この像がどう動くかと言うと、刻々向きを変えるのだ。円形の台座の中にモーターが仕込まれているらしく、電力で回転させるものだろう。私がそばに近寄ったときにも、回転し始めた。自動的に、ゆっくり向きを変えるギミックな仕掛けだ。「あれ？ 大仏が動いている！」と、初めてこの大仏を見る人をびっくりさせる効果がある。仏は全方向に目配りしているという意味だろうけれど……。

大蔵大仏と通称されるのは、この地区の名が大蔵だ



大蔵大仏

からだろう。台座の中の地下空間は、納骨堂になっている。

⑨ 吹上大仏（東京都日野市・善生寺）

2019年9月13日の午後、私は中央線・JR豊田駅に降り立った。その線路に沿うように、北東に約1キロ歩いたところに、善生寺がある。境内に大黒天堂があったので、のぞいてみた。



善生寺の大黒天

黒光りした等身大の大黒天像が堂の中央に突っ立ち、ファイティングポーズをとり、身構えているように見えた。木槌を右手に持ち、今にも叩きつけんばかりにし、眉をひそめ、目を見開き、明らかに怒っている。

何かを叫ぼうとしている。

「テメー、またサボっていやがるな、仕事をしろよ。やる気が出るように、この木槌でぶったたいてやるから、そこへ直れ！」と言いたいのだろう。

（大黒天は、もともと守護神であり、怖い神様なのだから、これでいいのかもしれない）

大仏は本堂の裏手にあるから、見えにくい。大仏の方向を指し示す看板に従い、本堂の脇に回り、他人の家の庭に入り込むような、こそこそとした感覚を覚えながら、人気のない庫裏の中庭を通り、階段を上がっていくと、ブロンズの大仏坐像がようやく見えた。右手を中空に上げる、おなじみのポーズの大仏様だ。

「私はサボっていません。誓います。こうしていることが私の仕事です」と言っているかのようだ。

その指先は繊細だ。ややうつむき加減だが、穏やかな表情をしている。

台座の中の空間をのぞくと、小さい仏像が並んでいる。大仏を建立するためには、それなりの資金が必要だが、この寺は広い墓地をもっており、資金を集められたのだろう。



吹上大仏（八王子大仏）

この大仏は八王子大仏とも呼ばれている。厳密に言えば、ここは日野市に属するが、八王子（隣の駅がJR八王子）に近いからだろう。

⑩うさみ観音（静岡県伊東市・うさみ観音寺）

2019年10月20日（日）、少し早めに家を出て、バスと電車で伊豆の宇佐美うさみに行った。熱海から伊

東線に乗り換えてのんびり行くことになる。宇佐美駅ホームから、うさみ観音の白い姿が山の中腹にぼつんと見える。直線距離で約2キロあるから、そうとう大きいことがわかる。それを目指して歩いていった。歩くには長すぎる上り坂だが、路線バスの便がない。宇佐美周辺の観光名勝の一つに挙げられているものの、行くには不便だ。普通に歩いても30分はかかる。

私は、この地に住む知人宅に顔を出した後、亀石峠に向かう県道（伊東大仁道路）を歩いた。うさみ観音寺はこの道路沿いにある。歩道の幅がほとんど確保されていないから、車の往来が気にかかる。本当はハイキング気分で山道を歩きたかったが、通行止めになっているところがあると聞いていたから、やむを得なかった。

秋の行楽シーズン中の日曜日だったが、客は私一人、後から一組の家族づれが来ただけだった。みやげ物・お守りなどを販売している女性の係員が一人いるだけで、拝観料も彼女が、入山する客に声をかけて支払わせていた。帰るときに思ったのは、一人300円では安すぎると。

順路を示す看板に案内され、まず展示室に入る。仏教発祥の地のネパールのブロンズ像や、仏陀の一生を

描く大きく精緻なレリーフを観て回る。中には立ったままで交接する男女像もあるが、まじめなコレクションだ。これだけでも、なかなかのものだが、この寺の本堂や境内一帯は、観音像や仏像がいっぱいあり、所狭しと並んでいるのは壯観だ。七福神など、一通りの仏像がそろっている。まじめに製作された仏像が多い。数が多いから、大量生産されたものかもしれない。ただし、威嚇する仏像は仁王像ぐらいであり、おとなしめの仏像が多かった。



うさみ観音

この主役は大観音だ。正式には世界平和大観音という。5階建ほどのビルの屋上に、座して合掌している。全体は白く、ところどころの飾りが黄金色だ。一見、座っている姿だから観音というより大仏に近い。長年、風雨にさらされているはずだが、痛んだところは見えない。しかし、基壇となっているビルは、一部の窓が壊れていたりして全体的に寂さびれているのが惜しい。室内は閉鎖されている。かつては展示室になっていたようだ。ドアの隙間から覗くと、薄暗く、物置のような空間だった。

客をもっと呼び寄せれば、いいのと思う。観音の霊力が足りないといつては失礼になるが……。

⑪ 正光寺大観音（東京都北区・正光寺）

2019年11月3日、都内の三方所を見て回った。まず赤羽駅から歩いて、北区岩淵町にある正光寺を訪ねた。

門を通ると、直線的な石畳の先に、直立する観音像が見える。ブロンズ製の観音像は、観たところ、高さ4メートルほどだ。

実は、私は小学一年のとき、近くの岩淵小学校に通っていたから、この付近については土地勘があり、た

まに再訪している。この観音像を60年以上前にも見
ていた。当時は、荒れ果てたような寂れた寺の境内に
悄然と立っていた。本堂もなかった。それは、情報に
よると、戦災にあつて消失していたのだ。



正光寺大観音

当時、子供心にも流麗な造形に感心して見入ってい
た。そしてなぜ、何のためにこれがここに存在してい
るのか、不思議に思っていた。取り残されたような、
周囲と不似合いな観音像が立っていたから。
でも今は、違和感のない存在になっている。正光寺
は、その後いつの間にか、境内を整地した上で、立派

な本堂を建て直し、金ぴかの仏像群を安置するまでにな
っている。境内を回ると、観音堂（ここにも金ぴか
仏像群が並べ置かれている）や、弁天像とその台に絡
みつく龍のブロンズ像のある池などがあり、興味深か
った。寂れた寺という印象は全く消えていた。



正光寺大観音の後姿

2006/2/11 に撮影したもの。その後
手前の駐車場には本堂が建てられた。

付近には寄りたいたところもあったけれど、正光寺を
あとにして、地下鉄南北線で赤羽岩淵から本駒込に移
動した。

⑫ 吉祥寺大仏（東京都文京区・駒込吉祥寺）

本駒込駅に出ると、曇り空だったため、太陽の位置がわからず、北と南の方角を完全に間違えて歩き出したが、しばらくして日が差してきたときに気づいた。地下鉄の駅から出るとき、たびたび方角で惑わされる。駒込吉祥寺へは、本駒込駅から北へ行かなければならなかった。なお、私が道を訪ねた地元の人々は、吉祥寺を「きつしように」と呼んでいた。



吉祥寺大仏
植栽がちょうど光背に見える

駒込吉祥寺はかなり大きな寺だ。門構えも立派だし、境内が広い。歴史的な建物（二階式の経蔵）もある。

明暦の大火の碑もあった。

正門から本堂前の広場に続く道がまっすぐに伸びている。大仏はその途中の脇にある。

周囲を威圧するほどの大きさはない。樹木に隠れがちになっており、緑色のブロンズ像は目立たない。高さ2メートルほどのコンクリート台座の上で穏やかに黙想しておられる。後ろから見ると、さすがに背中が広い。

⑬ 神楽坂大仏（東京都新宿区・安養寺）

本駒込駅に戻り、さらに東西線で飯田橋に行った。

おおまかな地図を頭の中に入れていたけれど、ここでも方角を間違え、北西に行くべきところ、南西の方向に行ってしまった。

負け惜しみに言うと、この辺の街中を歩き回ることとで、いくつか面白いことに出くわした。神楽坂通りでのフェスティバル、若宮町公園でのガラス吹き実演、歴史的建築物の近代科学資料館、その他、豪邸（壁を高くしているのが特徴的）の数々……。

安養寺は、人通りの多い神楽坂上の交差点にあり、小規模な寺ながら、観音霊場として御朱印の発行や祈祷をしている。当日、観音堂ではそんな例会が開催さ

れるらしく、10人ほどの人が中に座って祈禱らしいことが行われるのを待っていた。私は遠慮して、大仏があるという本堂に向かった。



安養寺の神楽坂大仏

案内矢印に従って階段を上がると、間口の狭い、きらびやかな部屋がある。多くの人は入れない空間だ。大仏は、奥まった祭壇の中央に鎮座する。これは丈六仏としてはやや小ぶりに見える。自身も金びかに輝い

ているが、多くの金びかの装飾に囲まれている。天井からも垂れ下がるものがあり、それが多すぎて、全体像が見えにくくなっている。下半分が雑多な(?)置物類で隠されているから、胸像のようにも見える。光の加減のせいかな、胸筋がよく発達している。手や指の形(印相)を見えるようにしてほしいところだ。

本日11月3日の大仏巡りはこれで終了し、都営地下鉄線の牛込神楽坂駅から帰った。

⑭ 西^{さいこうじ}仰寺阿弥陀如来像(東京都新宿区・西仰寺)

11月9日(土)午後から乃木坂方面に行く用事があったので、午前中に新宿区の西仰寺に寄ってみた。ここは、地下鉄・曙橋駅から南へ歩3分のところにある。交通の便がよいのだが、昭和の時代風の雑多な建物が並ぶ地区にあつて、迷路のような路地裏にある小規模な寺だった。寺があるから、開発から取り残されるという事情があるのだろう。この辺には他の寺も散在している。

石柱の門に「西仰寺」と刻印があるのを確認し、モルタル造りの本堂に続く石畳の道を歩き始める。見回すと、すぐ右手の分岐通路の奥に青銅の阿弥陀仏が正面を向いて座っていた。「これが大仏?」

大仏はどこにあるのだらうといぶかっていた私にとつて、あつけない対面だった。樹木に取り囲まれながらも、仏像自身の青緑の色合いがくつきりと浮かび上がっている。高さ137センチあるという石垣造り台座の上で、黙想するポーズをとっている。吉祥寺大仏と作風が近似しているが、胸の辺りに微妙な違いがある。



西仰寺 阿弥陀如来像

この像は丈六としても小さめのもので、大仏のリス
トに入れるのはどうか、と疑念を抱かせる。この写真

は、大きく見えるように、カメラのレンズを望遠にして撮影した。

大きさはともかく、端正な顔だちで、孤高を保つ威厳が感じられる。制作年代（元禄7年）や制作者が分かっており、新宿区の有形文化財に指定されている。

正面手前に置かれた二対の花器には、キクやユリが生けられていた。日ごろから、人びとに崇拜されていることが分かる。

⑮ 円通寺観音像（東京都荒川区・円通寺）

2019年11月23日（土）、午後の神田駿河台での用事にかこつけて、午前中、南千住駅から円通寺へ歩いた。駅に降り立つと、雨が降っていた。

南千住駅は、私が若かったころ通学に利用した駅だが、辺りはすっかり変わっていた。50年ほど前あった街並は今はない。けれど雨の冷たさが当時この辺をとぼとぼと歩いていた記憶を呼び覚ます。惨めな気分で見失っていたことが何度かあった。心も冷えきり、自分を見失っているかのように、ずさんでいた。

神奈川の自宅を出たときは雨が降っていなかったから、傘を持たなかった。濡れるのはかまわないが……。さて、円通寺は交通量の多い国道4号（日光街道）

に門を開いている。ユニークな建築の本堂が奥まったところにある。直線的な参拝道が通っており、門のところからでも観音像が見える。その本堂の屋根の上におおきな塔（パゴダ）が建てられており、大観音は、その正面に埋め込まれるように立っており、全身から黄金の光を放っている。発射台に組み込まれたロケットのようでもある。



円通寺 観音像

近づいて、本堂の前で見上げると、高さ5メートルほどの立像で、頬がふくらんでおり、微笑しているような顔の表情だ。彩色を厳密に言うと、やや赤みがか

っているから、銅色というものだろう。

背にした塔には、手すりのあるバルコニーのようなものが複数の層になっている。一番下の層は隠れて見えないが、7層あるようだ。つまり、七重の塔を模して作られたものだろう。

本堂はモダンだが、円通寺は、平安後期の源義家伝説の遺物や、戊辰戦争の際に上野で戦死した彰義隊士の墓がいくつか集められていたり、その戦いの舞台となった黒門が移設されていたりして、由緒ある寺だから、ゆっくり回りたいが、当日、法事がいくつもあるらしいので、本尊に参拝もせず、早めに退散した。帰りに、ほど近いところにある浄閑寺に寄ってみたが、こちらでも法事が行われていたので、ほとんど何も見ずに、追われるように立ち去った。雨が冷たすぎた。三ノ輪橋で、これまた思い入れの多い都電に乗ってJR王子駅に出た。

⑩ 芦ヶ久保大観音像（埼玉県秩父市・厳寿院）

数年前、西武秩父線の芦ヶ久保駅近くで、車窓から向こうの山の中腹に何やら大きな像らしいものが見えていた。あとで、なんだろうと思って調べてみると、大観音像であることが分かった。



観音大保久ヶ芦

この雑事記の最後の対象として、これを選んだのは特徴的な観音像だからだ。紹介したい大仏・大観音はまだ多くあるが、これで一区切りをつける。
2019年12月15日(日)、八高線の東飯能駅から西武電車に乗り継いで、芦ヶ久保駅で降りた。その駅の下方には、道路(国道299号)に接続して広い「道の駅」があり、多くの車が停まっている。横瀬川とその道路を横切り、小高い山に登ってゆく。ほどなく登り切る。

山頂付近は緩やかな台地が広がっている。墓地が区画されており、ここが霊園であることがわかる。法事客が車で来られるように、急な坂道でありながら、舗装されている。

その中央部に、大きな台座が設えられ、その上に青銅製の全身薄い緑色をした観音像がほぼ東向きに座している。

一般に大きな霊園には、大きい観音像がたてられていることが多い。ここでもその例に当てはまる。墓域を広げつつある霊園のシンボル(あるいは広告塔)になっている。川向こうを走る電車の窓から見えるように、大きめに造ったのだろう。

この観音像は、端正な顔立ちで、男性か女性かの性別を意識させない中性的な体形をしている。女性にしては胸のふくらみがない。それがおかしいと思っではない。観音は変幻自在なのだ。

一番の特徴は正座していること。これは珍しい。私にはこれ以外に、正座をしている観音像を見たことがない。死者のための祈りの像であるということだろう。

私撰人生訓集

盛丘 由樹年

十二の言葉を取り上げる。【一】内は出典または標榜者を示す。

① 幻滅の悲哀【不詳】

「人生には幻滅が多い」という命題であり、多くの場合に当てはまる仮説だろう。自分にもよく当てはまった。少年のころにこの言葉に出会っている。ある会で、ハンドルネームとして「幻滅の悲哀」を名乗っている人がいた。それから、私自身多くの幻滅の悲哀をかみしめた。これが「幻滅の悲哀なんだ」とたびたび認識させられた。この言葉で、悲哀を味わいながら生きてゆくことは、しかたがないというあきらめの境地になる。大きな悲哀もあり小さな悲哀もあり、波のように押し寄せてくるが、結局は今、乗り越えている自分がいる。

「思い通りにならないのが人生だ」と、ある男性が新聞のコラム記事（毎日新聞 2019/12/11 男の気持ち）で言っていた。

② みんな悩んで大きくなった

【仲畑貴志、野坂昭如、秋山仁】

ヒトには多くの悩みがある。煩惱というものかもしれない。「あいつには悩みなどありそうもないな」と思える人であっても、それぞれ他人に知られない悩みを持つていると考えると、ねたみや嫉みも消えるだろう。自分の悩みが軽くなる。悩むのは仕方がないと、あきらめられる。「オレだけではない、みんな悩んでいたんだ」と思うことで共有観念を持つことができる。

③ 人生意気に感ず

【魏徴『述懐詩』人生感意気、功名誰復論】
「魏徴『述懐詩』人生感意気、功名誰復論」
心意気を持つことであり、高い志をもって活動してゆく姿が目につかぶ。なかなかカツコよい言葉だと思っていたが、あらためて辞書（広辞苑）をひくと、「人間は人の意気に感じて行動する。金銭や名譽は問外である」と説明されている。金銭や名譽も考慮して行動することは現実には必要だ。それを目的にするのも、一つの生き方だろう。それらは後からついてくるものかもしれないが……。

④ 苦節十年【不詳】

70歳で亡くなると思ったら、そのとき「苦節70年だった」と思うのかもしれない。苦節にも程度があり、

修行などで耐えることに意味があり、その必要があるのなら、そこにとどまればいいし、耐えられそうもない苦節ならば、別な道に進むほうが賢いことかもしれない。その場合、未知の世界に飛び込む蛮勇あるいは無謀な決断が必要かもしれない。会社勤めが、苦節と言えるかもしれない。私など蛮勇は持たず、かなりの早期退職だったが、定年まで勤めあげたことになる。苦節三十四年だった。

あるいは結婚生活が苦節になるかもしれない。人によって苦節x年。自分のことは言わないでおこう。

⑤ ヒトは短期的には適応し、長期的には進化する

【NHKテレビ番組「軌跡の星」2019/12/18】

ヒトは自分を取り巻く世界や状況に柔軟に生きられる生物だ。多芸多才などところがある。どんな環境にも適応してきたから、地球上にこれだけ人口を増やしてこられた。

「住めば都」という格言にも通じることであり、どこに住んでいても、それなりに順応して生きられる。たとえば働く際に、自分にはどんな職場にも、あるいはどこに配属されようと、適応できる能力があるんだという自信を持ちたい。どんな役にでも演じられる「多

能性」をもっているものだろう。

⑥ 人の人生とはスリリングなものである

【毎日新聞2019/10/29 朝刊 女の気持ち】

これは堅実な人生を順調に歩んできた人の言葉だ。そんな人でも、スリリングだと言っている。

人生には落とし穴がいくつも潜んでいて、そこに落ちなかったのは、たまたまだったのかもしれないし、人は、目に見えない弾が飛び交う戦場のようなところを歩いており、弾に当たらなかったのは、やはり、たまたまだったことでありそうだ（だじゃれ）。ヒトにはそれぞれ運不運というような不確定要素によって、決められてしまうところがある。

自分の人生を振り返って、けっこう危ない橋を渡ってきたという経験の多さを感じるのは、自然のようだ。もしも、ある人との出会いがなかったら、または自分を取り巻く周囲の環境や置かれた立場が少しでも違っていたら、と考えると、ぞっとするようなこともあるだろう。いろいろな偶然が支配する世界で、生きていく。たまたまこうなったというケースが多いのだ。大して根拠もなく（一番当てにならない自分の感覚や勘に拠ったりして）うかつな選択をしてしまったとし

ても、結果的にうまく行く場合があるし、「想定外」のことも起こりやすい。結果オーライなら、運も実力のうちであり、自慢してよいことかもしれない。自分の不運を嘆くこともあるだろう。

「人生は予測不能」というフレーズを思い浮かべる。別のコラムの記事で「人生はばくちのようなものだ」と言った人が紹介されていた。彼は浮き沈みの多い人生を送った人らしい。今では公園で暮らしているという。ある程度の勝算があれば、ばくちをしてもよいと私も思うが、それが無いのに賭けをしたなら、どうなるかわからない。一か八かでは、リスクが大きすぎるかもしれない。人生を棒に振るようなことになっては、つまらない。

⑦ 人生七十古来稀なり【杜甫『曲江詩』】
還暦60歳は人生の大きな節目だろう。それを10年も過ぎて70歳まで生きたら、オレも古希に到達したんだ、という感慨を持ちたい。古来まれなる年齢になったわけだから。あとは「付録かオマケ」のようなものと思えてくる。あとの人生はもうどうでもよいのだという気楽さをもてる。でもやはり、付録が盛りだくさんにあるほうがいい？

⑧ いつ死んでもいい。でも今日でなくもいい

【佐野洋子「ヨコさんの言葉」NHKテレビ番組】
これは、佐野洋子さんの友だちの高齢の母親が語ったことだという。ささやかながらも、生きる願望を持って一日を過ごしている人の姿がある。多くの人は、自分の死期が近づいていることはわかっている。現実的にいつ死ぬかはわからないし、突然の事故や病気が発生すれば、突発的に死ぬ可能性があることを知っている。それでも「今は死にたくない」が本音だろう。怠惰な人に対して使う「今日できることは明日にまわさない」（先憂後楽）という訓戒らしい言葉もあるのだが、死ぬことは後回しにしたいし、そうありたい。

⑨ 明日は明日の風が吹く

【不詳。映画「風とともに去りぬ」で主人公がラストに語ったセリフ「Tomorrow is another day.」の訳でよく知られるようになった】

これは、先憂後楽とは逆を行く言葉かも知れない。「明日はどうであれ、今日は楽しもうぜ」というようないいかげんな快さ、気楽さがある。「明日の風」とは、いくつかの解釈が可能であり、空気だったり環境だったり、自分を取り巻く状態だったり。常に変化す

るものであり、自分の内部からわき起こるものも含みそうだ。

「明日」に関する言い回しはいくつかあり、単純に言えば、「明日があるさ」。「明日は明るい日と書く」

【それぞれ歌の文句より】というだけやれの解釈もおもしろい。今日はダメでも明日を期待したい。多くの不安がある中で、こうした樂觀や、希望的観測は必要だろう。

ケーセラセラ（なるようになれ）と言うのもいい。

⑩ さよならだけが人生だ

【千武陵『勸酒』、井伏鱒二訳】

こんなことを言う人は、未練を残さないような、充実した人生を送ったのだろう。「思い残すことは何もない」と言っているようで、さばさばしていることに、好感が持てる。人生を達観した「悟り」でもあるかもしれないし、あるいは、生きることに執着心を失った人の言葉かもしれない。

⑪ 恥の多い人生だった

【太宰治『人間失格』、つかこうへい】

自分の言動を恥と思うのは、謙虚なことだ。自分に対して客観的な評価を下している。自分を客観視できる

のは、ヒトに備わる能力のひとつだろう。恥だと思ふことで、自制心が生じ、ハメを外さないことになる。

この言葉は、自分にはそれ（自制心）が弱かったという反省かもしれない。自分は何度もハメをはずしてしまった……。死ねば、もう恥をかくこともないという「安らぎ」を見出していることかもしれない。

⑫ 人生は劇のごとしというように、私も人生の舞台

を最後まで演じきっていきたい

【毎日新聞2019/11/23朝刊女の気持ち】

人生を何々と定義する例は多い。この文書にもいくつか示した。昨年（2019年）、ある殺傷事件に関係した（巻き込まれた）男が「オレの人生は何なんだ！」と叫んだとされていることが、私にとっては印象深い。彼は自分の人生を定義できなかったことになる。

人生を演劇として、自分を一人の俳優とみなすことは、かなりの射を射ていることだろう。自分の立場や役割を踏まえ、一人の役者として演じることが最も「自分らしいこと」と言えそうだ。舞台の中心に自分がある。